

県立高校入試改善検討委員会（第3回） 会議録

- 日 時：令和4年1月31日（月）14時00分～16時05分
- 場 所：岩手県民会館第1会議室
- 出席者：佐々木修一 委員長、浅沼道成 副委員長、鎌田英樹 委員、小山田紳也 委員、今村久美 委員（代理出席者：菅野祐太 氏）、梅津久仁宏 委員、千葉治 委員、高橋正浩 委員、松葉覚 委員、橋場中士 委員（代理出席者：小林智 氏）、岩館智子 委員、八重樫千晶 委員、村上智加子 委員、千葉仁一 委員、山田市雄 委員
県教育委員会教育次長兼学校教育室長 高橋一佳
県教育委員会事務局学校教育室 学校教育企画監 中川覚敬
首席指導主事兼高校教育課長 須川和紀
首席指導主事兼義務教育課長 三浦隆
主任指導主事 高橋直樹、菊地健
指導主事 中田裕治、川原恵理子
- 傍聴者：報道6人

○ 会議の概要

1 開会（高橋直樹 主任指導主事）

2 教育委員会あいさつ（高橋一佳 教育次長）

本日の資料は、前回の委員会でもいただいた意見をもとに再整理した。また、より具体的な議論ができるように、A4版1枚の概要図も本日の資料とした。

これらの資料を参考にしていただき、一般入試、推薦入試、入試日程の順に検討を行っていただく予定としている。限られた時間ではあるが、忌憚のないご意見をいただきたい。

3 委員長あいさつ（佐々木修一 委員長）

コロナ禍で大変なところ、また、お忙しい中お集まりいただきありがとうございます。前回の第2回の委員会で、一般入試について最初に検討すべきという意見が多く、今回の議事進行はそのようになった。事前に送られた資料に目を通したが、1つ1つの議題について、どのように変えるか、なかなか難しいと改めて感じている。本日の議題は大きく3つある。皆様からの意見をいただきながら進めていきたい。

4 議題（進行は、佐々木委員長）

（1）一般入試について

[須川 高校教育課長]

【本日の議論の進め方、資料全体の構成について説明】

[菊地 主任指導主事]

【資料1「Ⅱ 県立高校入試改善の論点」、資料2のうち一般入試について説明】

[佐々木 委員長]

説明資料について質問はあるか。

（なし）

[佐々木 委員長]

一般入試について、2つ論点を示されている。1つ目の「学力検査：調査書等」の比率を、定員のすべてについて、各高校が定めるようにすべきではないか。」という論点について、意見をいただきたい。

[浅沼 委員]

各学校に任せるということは理解した。もともとの選抜方法の①～⑦が複雑で理解しづらいが、どうなるのか。①～⑦は残るのか。

[菊地 主任指導主事]

①～⑦が分かりづらい点、定員が満たされていない状況の中で各学校が特色を出せるようにという点から、各学校で「学力検査：調査書等」の割合を定めることができるようにしてはどうかとしている。

①～⑦はなくなると考えていただきたい。

[浅沼 委員]

すごくはっきりした。①～⑦が残り、学校に任せるというから、もっと複雑になるのではないかと考えたところだった。

[千葉 委員]

論点として「各高校の特色を活かした入試」と示されている。何となくのイメージとしては分かるし、誰も反対しないと思うが、「各高校の特色を活かした入試」とは具体的にどういうものか。例えば、これだと活かされていないということで説明してもらえば分かりやすい。

また、面接についてだが、有効な選抜資料となっていないというのは、内容なのか時間なのかというところも説明してほしい。

[菊地 主任指導主事]

参考資料5ページの「3 平成28年度入試から令和4年度入試の選抜方法の推移」をご覧いただきたい。令和4年度入試では、①～⑦の選考方法のうち、①が60%超になっているということから、どの学校も同じような選抜方法になっているということが分かる。その背景として、志願倍率が低く昨年度は0.8倍程度ということがある。そのような状況の中でも、各学校の特色が活かされる入試をすべきと考えている。一般入試の中では、「学力検査：調査書等」の比率を各学校で定めることができるようにすることが、その学校の特色を出す方法だという考えの資料としている。

また、「面接は、各高校の特色を活かした入試で」としているが、これは推薦入試で必要に応じて実施するようにはいかがかとしているところである。

[千葉 委員]

高校によっては、学力に比重を置いている学校、様々な専門科目を持っている学校、種市高校のような特色ある学科の学校、部活動や運動面、地域との関わりを強めることに特色がある学校などがある。学力検査問題はどの学校も共通になるが、どういう入試が特色を活かした入試なのか具体的に説明されると、こういう風にやるべきだということを考えることができるがいかがか。

[中川 学校教育企画監]

補足させていただく。

高校の特色という言葉が出たが、高校に対して、より選択肢を与えるということが1つの大きな点である。今、70%はA選考と県教育委員会が一律で決めているので、学校の裁量が限られてしまっている状態である。定員割れの学校では、70%の段階で選考が終わってしまう。より広く、生徒たちの学力を測る選択肢を各学校に委ね、調査書に比重を置くとか、学力検査に比重を置くというような各学校の選択肢を広げたいということである。

2点目の面接に関しては、指摘のとおり、面接時間が大規模校で短いというところは、率直に受けとめ、そこで生徒の資質・能力を測るとするのは難しいということから見直しを考えている。

[千葉 委員]

選抜方法の③A選考 70%、B選考 20%、C選考 10%というのは受検者や合格者に対する割合ではなく、定員に対する割合ということか。

[中川 学校教育企画監]

そのとおりである。

[千葉 委員]

了解した。

[菅野 氏（今村委員の代理出席者）]

現在の選抜方法は、定員の7割を5対5で決めた後に、残り3割を各高校でこの①～⑦から選んでいるということによいか。

もう1つ質問したい。割合をすべて学校で定めるとするのは、どうするというのか。現在の配点では、学力検査、調査書、面接、作文又は小論文、適性検査とあるが、このすべての項目の内容について、配点が学校裁量になるのか。

5教科の学力検査と調査書は非常に相関が強いと思う。

例えば、地域の探究について取り組んできた生徒が、面接で、プレゼンの発表を得点化したいというときに、この調査書以外の60点ではすごく小さい。そういうところにも学校裁量があるのか。

[菊地 主任指導主事]

資料では、現在の制度と同じく学力検査500点、調査書等を合わせて500点としているが、この500点对500点の比率を、各学校で定めるようにしたらどうかということを論点としている。

学力検査や調査書ではなく、違う観点からの検査をするということについては、次の推薦入試のところで、各学校の独自に行う検査ということができるようになれば、プレゼンテーションや、長い時間をかけた学校独自の視点による面接、口頭試問などが可能になるのではないかと考えている。

[村上 委員]

各高校の特色を活かした入試で面接を実施というのは、一般入試ではなくて推薦入試の方で面接を実施するという提案だと思う。先ほどの説明の中で、面接時間について、大規模校では3～4分でなかなか生徒の特徴を把握できないという説明があった。しかし、一方では小規模校で長い時間をかけることが可能な学校もあると思う。一律に、面接は一般入試では実施しないということではなく、小規模校においては面接ができるようにすることが可能であれば、各高校の特色がより活かせるかと考える。

面接がなくなり、学力検査と調査書の2つの検査ということになると思うが、調査書は中学校からのものであり、面接は、高校側の目線で受検生を見るという機会になっていたと思う。一律に面接はなしということではなくてもいいと考える。

[須川 高校教育課長]

今のような点も含めて、いろいろな意見をいただければと思う。

現行の入試では、面接を一般入試でも推薦入試でも行っている。一般入試では有効な選抜資料になっていないと資料にはあるが、やった方がいいとか、やっぱりいらぬのではないかとか、そういった意見を皆様からいただければと思う。

[佐々木 委員長]

「学力検査：調査書等」の比率について意見を言ったが、やはり面接のあり方も関わってくるので、一般入試の中での面接のあり方についての意見もあわせていただければと思う。

[梅津 委員]

資料の論点では、「定員のすべてについて各高校が定める」というところについて、今事務局で考えているのは、各学校1つのパターンと考えているのか。または、現行のように、定員を割合ごとに区切って、複数のパターンと考えているのか。

[菊地 主任指導主事]

この委員会で意見をいただきたい点ではあるが、今のところのイメージとしては、各学校1つのパターンということを想定している。

[梅津 委員]

では、そのことを踏まえての意見だが、先ほどから各高校の特色が活かされた入試という話題があるが、事務局案のままだと、一般入試は各高校の特色があまり活かされない入試であり、推薦入試が各学校の特色が活かされた入試という位置付けになると思う。

一般入試でも各高校の特色は活かされるべきだと考えると、一般入試の中で様々な生徒を多様な観点で選抜できるような仕組みがあるとよいのではないかと。現行制度をあまり引きずるのはよくないと思うが、今のC選考は学力検査に比重を置いたり、B選考では中学校での様々な活動を重視したりという意味合いがあると思う。

それから、一般入試でも各学校の特色を活かすために、「うちの高校では一般入試で面接をぜひ実施したい」という学校もあるのではないかと。推薦入試の志願者が少ない学校もあり、一般入試でしか選抜できない学校があることを考えると、学校が求める生徒を選抜するために一般入試で面接が必要だという学校もあると思う。

また、各検査の配点比率まで踏み込んで話をすれば、「うちの学校は面接を重視したい」という学校があってもいいと思うので、学力検査500点、調査書等500点の中身についても、ある程度各学校で決められる部分があってもいいと思う。

[山田 委員]

私も梅津委員と同じようなことを感じた。

以前はどの学校も、学力検査と調査書の比率は同じでしばらく続き、ABC選考になったかと思う。定員のすべてについて各学校が1つの比率にするとということだったが、そうすると元に戻るといったようなイメージになると受け止めた。

B選考やC選考が入った背景は何だったのだろうか考えると、その1つの要因としては、例えば中学校3年になる頃までは内申点はあまりたいしたことはなかったが、中総体が終わってから猛烈な勢いで勉強し、学力検査の得点は3年生の後半に猛烈な勢いで向上した生徒もいるはずだということがあると思う。それから、内申点について、大規模中学校の生徒と小規模校の生徒の内申点は若干の差異があるんじゃないかというところで、そういった中学校の学びが同じ環境で必ずしも来たわけではないという前提に立って、B選考C選考が工夫されてきたのではないかと思う。今回の改善で、学校の定員のすべてを同じ方式に改めるというのは、何か違和感のようなものを感じている。改善するのはいいが、出身中学校の学びに若干の差異があると考えれば、A選考、B選考、C選考のようなものを、各学校も選抜方法に残しておくのもいいのではないか感じる。

[中川 学校教育企画監]

今の二人の意見に関しては、事務局の方で検討させていただければと思っている。

資料1「入試改善の方向性」の「2 検討の視点」にある第1回で意見をいただいたところにも影響があらうかと思っている。今、議論いただいているのが「(3) 各学校の特色や入試での特徴を十分に」というところに関わるころだと感じていて、今いただいた意見からは、かえって各学校の自由度を小さくなるのではないかと。貴重なご意見として伺った。一方で(2)の「誰からも

分かりやすい制度」というところも視点の1つとして必要なもので、そのあたりのバランスを見ながら、ぜひこの場でも様々な議論をしていただければと思う。

[佐々木 委員長]

ここまでの意見は、資料2の論点の第1点目、各高校の特色が出せるように「学力検査:調査書等」の比率を、定員のすべてについて、各高校が定めるようにすべきではないか。」について、方向性については反対意見はないところだが、そのように解釈してよろしいか。

(異議なし)

それから2点目だが、面接については、「各高校の特色を活かした入試で必要に応じて実施するようにすべきではないか。」とあるが、各学校の特色として一般入試の中で面接をやってもいいのではないか、その方が望ましいという高校もあるのではないかという意見も出ているので、全高校で面接を必ずやるのではなく、面接を行うも可とする方向ということでよいか。

(異議なし)

一般入試の論点の方向性については、各委員とも今申し上げた方向性の考えだと確認できた。

(2) 各高校の特色を活かした入試について

[菊地 主任指導主事]

【資料1「Ⅱ 県立高校入試改善の論点」、資料2の推薦入試について説明】

[佐々木 委員長]

ただいま説明のあった資料の内容について質問を受けたい。

もっと詳しく説明してほしい点や分からない点はないか。資料の不明な点をなくしておきたい。

[千葉 委員]

資料の中では定員の何%をとということがないが、現行の推薦入試のままか、あるいは、増やすのか。そのあたりのことを説明してほしい。

[菊地 主任指導主事]

これまでも入試改善検討委員会では、推薦入試の割合については意見をいただいてなかったということもあり、全募集定員の何%を推薦入試の定員とすべきかは記載していない。

意見がありましたら、いただきたい。

[村上 委員]

1点目だが、「部活動の実績を中心とした評価から、日常的な学習や活動で身についた資質・能力の評価に改善」ということだが、部活動の実績についても日常的な活動の中での評価と言えらるるか。ボランティア活動や校外活動だけではなく、中学校での部活動も推薦の要件の一つとして、認められると考えられるか。

[須川 高校教育課長]

部活動については一切見ないということではないと考えている。現在の制度では、部活動の実績が大きな割合を占めている印象があると思う。今回の改善によって、学校によっては部活動も含むと思うが、生徒の多様な面をバランスよく評価できるように変えていきたいということである。

[村上 委員]

例えば、スイミングスクールでの活躍とか、体操の校外クラブでの活躍とか、そういう部活動ではないスポーツクラブ等での活動なども含めてということによいか。

[中川 学校教育企画監]

学校外の活動も含めてである。

補足するが、部活動も含めて日々の3年間や1年間の取組の過程をしっかりと見ていくという意味で、

「日々の活動を」としている。成績という点での評価ではなくて、その結果までの活動の過程を見ていくというところが大きなポイントだと考えている。

[千葉 委員]

部活動が中心となってきたということだが、現行の制度について具体的にどのような課題があったか。例えば、部活動に偏っていたのならば、それが生徒の高校生活にどのような影響があったのかとか、具体的にどういうことが問題となって部活動に偏らないようにということが出てきたのか。

現在の制度をどう評価、分析して、そして、どういう改善をとということについて具体的に示してほしい。

[菊地 主任指導主事]

参考資料1の8ページをご覧ください。推薦入試に係る状況として、(1)に「志願倍率の低下、志願者が0名の学校・学科の増加」とある。まだ高校への入学が決定していない状況でありながら出願してくる生徒がいない、または定員に満たない状況にある。例えば、4名の定員として条件を出しても4名来ない状況ということから、現在の推薦入試というものは、出願できる生徒が少ない制度となってしまっているということと言えると思う。

高校が条件を提示しても当てはまる生徒がいない、だから出願できない。または、受検生にとって、その高校の推薦入試が自分の見て欲しい面を見てもらえる入試となっていないということが言えると思う。そういったところが現在の推薦入試の倍率から見えてくる課題として捉えている。

[鎌田 委員]

前回の委員会で推薦入試の問題点が出たと思うが、今回整理された資料では、推薦入試を廃止して一般入試に統一するという選択肢はない。推薦入試を廃止するという考えはないということか。

推薦入試に出願できる一部の生徒には2回受検できるチャンスがあり、他の生徒にはない。部活動で優秀な成績の生徒にだけ推薦入試のチャンスがあるのはいかがなものかという話も出たと思う。

資料1「入試改善の方向性」に推薦入試で合格後に、入学までに学習指導を行うことで、その高校に見合った学力を取得してもらうということが書いてあるかと思ったが、そこまでして推薦入試で入学させなければならないのかと思いながら読んだ。

推薦入試で合格した後に、4月までに課題をやっておくという条件付きで合格にしているということでもいいのか。

[菊地 主任指導主事]

推薦合格者に対する学力調査は平成28年度入試から行っているが、この学力調査は推薦入試に合格した生徒が、一般入試の日に、一般入試と同じ問題を合格した高校に受けに来るというものである。それを目標の1つとして、中学校での基礎学力の定着や学習へのモチベーションの維持ができるようになっていくという現状を説明した部分である。

[鎌田 委員]

推薦入試を合格した生徒も、一般入試と同じ問題の調査をすることで、その生徒の学習の現状を把握できるということか。

[菊地 主任指導主事]

そのとおりである。

[山田 委員]

学校によっては推薦入試は実施しないという選択はできるか。

[菊地 主任指導主事]

現行の制度としても、学校として推薦入試をしないということも可能な制度になっている。改善後の制度においてはどうすべきか意見をいただければありがたい。

[小林 氏（橋場委員の代理出席者）]

現在の推薦入試について、どの高校でも推薦基準の最初に「本校の教育を受けるに足る能力・適性を有する者」と必ずある。中学校にとってはこれがすごく難しく、この各学校の「能力・適性を有する者」はどう考えればよいかと悩んでいる。これと同じことが、「日常的な活動で身についた資質・能力」を評価するということにも言えると思う。高校ではどうやって評価するのか。各高校が考えることになると思うが、このことについて考えているところがあれば教えていただきたい。

また、推薦入試も一般入試もだが、高校のためにやるものか、それとも、中学生のためにやるのか。現在、多くの方法が議論されているが、これを変えてどうなるのかと思う。

[須川 高校教育課長]

確かに分かりづらい部分があるかと思う。

現在、高校では、「三つの方針」ということで、入学するときにはどのような力を持っている生徒に来て欲しいか、卒業するまでにどんな力をつけさせるか、3年間でどんな資質・能力を身に付けるためにやっていくかという方針を検討している。「三つの方針」は、来年度中に各高校から公表されることになっていて、中学生や保護者にも分かりやすい表現で書くこととしている。

各高校で求めている資質・能力や適性は、分かるようになって考えている。

[中川 学校教育企画監]

補足だが、誰のための入試改善かということについて、当然、生徒のためということは事務局でも中心としている。

これまで推薦入試が部活動の成績に特化されていたが、それ以外の特色を持つ生徒がいても評価されなかった部分をしっかりと評価していけるような形にできないかお諮りしたい。

また、具体的なその測定の方法について議論いただきたいと思う。面接や小論文、調査書などで考えている。

[須川 高校教育課長]

もう1点追加したい。

資料2の一番上のところに「県立高校入試の目的」があり、そこでは、生徒が持っている様々な能力や適性を活かせるように、また、高校でも各学校の特色づくりを進めて選んでいただくということがある。いろいろな生徒の得意なところを活かせる高校を選んで欲しいという趣旨である。

[小林 氏（橋場委員の代理出席者）]

高校で特色や方針を打ち出し、子供たちやその保護者がそれを見て、この高校で学びたい、学ばせたいとしていくというのは大変いいことだと思う。しかし、それに具体的に書かれていないと高校を選べないと思う。

例えば、理数の力を伸ばしますとか具体的に書かれていなければならないと思う。また、理数の力を伸ばすというのであれば、理科や数学の傾斜配点を積極的に入れるなどの方法もあわせて行っていくべきだと思う。

先ほど部活動の話も出たが、部活以外の習い事のスポーツクラブ実績を残している子もいると思う。子供の特性や良いところを伸ばすという意味でとても大事なことだと思うので、できるのであればそういうところも見してほしい。

[須川 高校教育課長]

そのとおりで、今後の入試がそういった方向性になるように、いろいろ意見をいただきたい。学校の教育活動の中に限らず、様々な活動、多様な能力を評価していきたいと思っている。

また、現在でも、傾斜配点は学校でできるようになっているところである。

[小山田 委員]

今、推薦入試の志願倍率は1倍を下回っているという状況だが、この見直しによって、志願倍率が劇的に向上するというイメージでよいか。

[須川 高校教育課長]

劇的に向上するかは不明なところもあるが、現在よりも生徒が志願しやすい方法になればと考えている。

[小山田 委員]

令和7年度から新しい制度で入試を行うとして、それがうまくいっているかどうかの評価は、どのように行うのか。

[須川 高校教育課長]

現在も、毎年入試を行う中で、中学校、高校などから意見を聞きながら、よりよい方向に修正している。また、およそ10年に1度のペースで開催される入試改善検討委員会で評価し、改善の提言を受けている。今後も、このような形で進めていくと考えられる。

[菅野 氏（今村委員の代理出席者）]

先ほどの議論の続きとなるが、子供を真ん中に考えて改善していくというのは、非常に重要だと思っている。その中で、「中学校長の推薦不要とし、自己推薦により出願」とあるところは非常に良いことで、ぜひ、この方向にして欲しいと思うが、さらに踏み込んで考える必要があるのではないかと。

6年前に教育機会確保法ができたが、不登校の子たちが、全国的にも岩手でも増えているということも視野に検討していく必要があるのではないかと。不登校で調査書の各教科の評定が記載されないということもあると思う。そういった中でもチャレンジできるような、そういった生徒も見えていくことができる入試について検討する必要があるのではないかと。

[佐々木 委員長]

推薦入試の論点の1点目の「部活動等の実績（大会の成績等）を中心とした評価から、日常的な学習や活動で身についた資質・能力の評価に改善すべき」について、先ほど難しいのではないかと指摘もあった。

この部分について、委員のみなさんはどう考えるか。県大会で2位だったというようなところを評価するのではなく、それを通じてこういう能力が身に付いたかを評価するというところか。

[千葉 委員]

資料の「県立高校入試の目的」に、「多様な能力・適性や意欲・関心に基づいて」とある。多様な能力・適性等には部活動の成績等も当然入るのだから、部活動についても評価し、それだけではなく、日常的な学習や活動で身に付いた資質・能力の評価もするとして、子供に選択肢が増えたということにしていくのだと思う。資料のままの表現では、部活動だけではなく、日常の授業もちゃんとしなさいというように聞こえてくるのではないかと。

資料2の「検討の視点」のキーワードを見ると、特に、「生徒・保護者にとって分かりやすい」とあり、そういう制度にすべきだと思う。

そのためには、一般入試でも推薦入試でも、高校はどういう生徒を望んでいるのかが分かり、子供たちはその高校に行きたい、将来こうなりたいと考えた場合に、では、中学校で何を頑張ればいいのか、どういうことを目指せば自分の自己実現に繋がるのかという目標を持つためにも、「生徒、保護者にとって分かりやすい」というのは、すごく大事なキーワードであり、その視点を持って考えることが大事だと思う。

[佐々木 委員長]

部活動の実績に加えて、さらに範囲を広げて、日常的な学習や活動で身についた資質の評価を追加

するべきだという意見だった。この点について他にあるか。

〔松葉 委員〕

資料に「部活動の参加の任意化」という言葉があり、本県もそのような状況になってきている。学校での部活動ではなく、クラブチームで活動したり、自分の特技を活かすようなことを放課後にやったり、そういったことが非常に多くなってきている。そういったことを考えれば、運動の部活動だけでなく文化活動も含めることなどを含んだ表現とすればいいのではないかと思う。それによって、自分はこういう活動をしているから、基準を示されたこの高校では受け入れてもらえそうだから自己推薦するとなると思う。部活動という学校内だけの活動となるのではなく、少し広い意味の表現となるよいのではないか。

〔梅津 委員〕

現行の推薦入試については、平成 16 年度に廃止し、新しい入学者選抜の A B C 選考が導入された。3 年後の平成 19 年度に現行の推薦入試が開始され、現在の推薦入試はこの平成 19 年度にスタートしたのがベースになっていて 15 年経っている。15 年間の中で社会情勢や考え方が変わってきている。

部活動について言えば、任意の参加で強制しないとか、自主的・自発的な取組というのは、この 4、5 年のところで定着してきたもので、15 年前は県でベスト 4、ベスト 8 という成果を評価するというのは間違ったことではなかったのだと思う。平成 16 年度に一般入試で A B C 選考を導入し、3 年後に現行の推薦入試を開始するときに、今思えば、一般入試の A B C 選考は止めるべきだったのだろうと思う。

また、一般入試で、多様な選抜ができ、面接を重視したり、学力検査を重視したり、調査書の内容に重点を置いて見たりでき、それを定員の中でいくつかに分けて選抜できるのであれば、そもそも推薦入試は廃止して、一般入試だけで選抜できると考えている。そのことを踏まえて、3 点ほど話をする。

1 点目は、部活動について、現状の県でベスト 4、ベスト 8 という基準を示して、それを中心にした推薦入試というのは、見直すべきだと思う。

2 点目として、先ほど「誰のために」という話があったが、もちろん、中学生のためだと思う。中学生が、将来を考えて、充実した高校生活を送れるようにということで高校入試をやると思うが、一方で、各高校の学校づくりにあった生徒に来て欲しいというのが高校側にはある。

3 点目だが、もし、一般入試で多様な選抜ができるとすれば、推薦入試は廃止ということも含めて検討してもいいのではないかと思う。廃止しないまでも、少なくとも、各学校でやるかやらないか判断できるような形が望ましいと思う。

〔佐々木 委員長〕

かなり核心に触れる意見をいただいた。

論点の 1 点目の「部活動等の実績を中心とした評価から」という部分についてだが、様々な個人的にやっている活動も見るということが分かる表現にし、日常的な学習や活動で身に付いた資質・能力等も評価するというような形ですべきということだと思う。概ね賛成だが、部活動の実績を高校が示すことについては止めるべきだという意見がほとんどだったという解釈でよいか。

〔村上 委員〕

推薦入試が部活動実績を中心に行われていた前提として、部活動がほぼ全入ということがあると思う。部活動が任意加入になっている現状では、部活動実績だけで推薦入試を実施するのは不公平だということが議論の前提になっていると思うので、今の議論はいろいろな実績、資質・能力を持って推薦入試に臨むことができるということで非常によいと思う。

部活動とその他の活動をどのように評価していくか、物差しが 1 つじゃないというのはなかなか難

しいと思うが、各高校で評価を工夫することはこれまでもしているので、評価は可能だと思う。推薦入試で様々な能力を見ましようという議論は、本当にいいなと思っている。

ただ、令和7年度からスタートというところはちょっと気になる。現状でも部活動は全入ではなく、部活動中心の推薦入試というのは、次年度からでも検討が必要ではないか。

[佐々木 委員長]

令和7年度からでは、開始まで時間があるので、前倒しをして欲しいということか。

[村上 委員]

令和7年度から始まる制度の議論としてはその通りということだが、次年度入試についても検討してもいいのではないかとということである。この方向で進めていくことについて異論はない。

[佐々木 委員長]

1点目の論点については、部活動の実績のみということではなく、学校の部活動以外でやっている様々な活動も加える表現とすることでよいか。

[山田 委員]

前回、平成16年度にABC選考を導入して推薦入試を廃止したが、3年後に、なぜ再開したのか背景等を質問した。ABC選考を導入すれば、部活動の実績についてもB選考で見ることができると思っていたが、そうではなかったということから推薦入試は復活したということを知った。

高校側とすれば、日常的な学習や活動の中であげた成績なども見たいのではないか。佐々木委員長がまとめているように、「実績を中心とした評価から」となると実績は軽視されてしまうというように感じ、そうすると、平成19年度の推薦入試復活の背景から心配なところもある。

理想は、実績に日常的な活動等における資質・能力の評価も加えれば、高校現場では少し助かるのかと思う。

[佐々木 委員長]

部活動の実績と同等に扱うという形にすれば、高校からの理解も得られるということかと思う。

表現については、事務局の方で工夫してもらうが、趣旨はそのとおりということでよいか。

(異議なし)

では、論点の2つ目の「現行の評価項目を弾力化し、各高校が多様な独自検査を実施できるようにすべきではないか。」について、これは日常的な学習や活動について資質・能力の評価をするために様々な独自検査を実施できるようにするというものでよいか。

[須川 高校教育課長]

そのとおりである。

[佐々木 委員長]

この部分について意見はあるか。

[小林 氏 (橋場委員の代理出席者)]

多様な独自検査には、小論文、面接の他に何が想定されるか。

[須川 高校教育課長]

例えば、プレゼンテーションがあると思う。中学校時代に地域活動でやったことやボランティア活動でやったことをプレゼンするなど様々なプレゼンのテーマや方法が考えられる。

[鎌田 委員]

現行の一般入試は志願倍率が1倍を切っている。一方で、推薦入試も志願倍率が0.82倍という現状の中で、あえて、推薦入試を進める積極的な意味は何か。

例えば、1倍を超えるような学校については、部活動やそれ以外の日常生活での活動を考慮すべきというのは分かるが、いっそのこと、1倍を超えない高校については推薦入試はやらなくてよいので

はないか。

[中川 学校教育企画監]

そういった意見もいただければと思う。

まず、事務局としての考えは、生徒の多様な資質・能力を測る場を多く作りたいというところが第一にある。調査書と学力検査の割合を自由に変えられるとしても、それだけでは弾力性は限られるので、論文や面接、プレゼンテーションなどを中心に評価するような場面があるべきではないかというのが事務局の考えである。

高校入試というのは高校に入るための選抜ではあるが、中学校3年間の教育活動にも影響を与えるので、総合的な学習の時間などの探究的な学びが中学校で進められていく中で、そういったことが評価される機会があった方がいいのではないかと提案したところである。

加えて、学校推薦から自己推薦にすることで倍率についても変わることは予想される。ちなみに、今年宮崎県が県立高校の推薦入試を自己推薦に変更し、志願者が2倍以上になったというニュースも先日あった。

倍率にも捉われずに、あるべき入試の姿についても含めて議論いただければと思う。

[鎌田 委員]

学校長の推薦なしで推薦入試を受けられるならば、誰でも2回チャンスがあるということになり、志願者は全員が推薦入試を受けることができ、公平であり賛成できる。

[佐々木 委員長]

それでは、各高校が多様な独自検査を実施できるようにすることについては、議論の流れから当然だということもあり、各高校の方で工夫するという趣旨でよいという意見でまとめた。

(異議なし)

次の3つ目は、「中学校長の推薦は不要とし、自己推薦により出願するように改善すべきではないか。」は、校長推薦から自己推薦への転換だがこの点についていかがか。

(意見なし)

これは大きな変更になるが、賛成ということでよいか。

[松葉 委員]

子供たちが中心の受検であれば、チャンスはすべての子供に同じように与えるということで非常に良い。校長推薦の場合だとそういうことがない場合も過去にはあったが、なかなか苦労した部分もあった。生徒が自分でという形にしてもらえれば、中学校として非常にありがたいと思う。

ただ、他県では学校推薦も残っている。そこにメリットがあるからなのか私も分からないが、その良さというものについて次の機会にでもいいが知ることができればいいと思う。

[鎌田 委員]

確認だが、推薦入試はA高校を受け、一般入試ではB高校を受けることができると考えてよいか。

もしかしたら全員が2回受けられることになるが、ドラスティックに変えることを前提にした自己推薦なのか。

[須川 高校教育課長]

その点については、次の議題とも関わってくる。

推薦入試はA高校を受け、一般入試はB高校を受けることができるというのも選択肢の1つだと思うので、意見をいただければと思う。

[佐々木 委員長]

次の議題に移りたい。

(3) 入試日程について

[菊地 主任指導主事]

【資料1「Ⅱ 県立高校入試改善の論点」、資料2（概要図）のうち資料3入試日程について説明】

[佐々木 委員長]

今の説明、資料について質問はあるか。

[村上 委員]

資料3の2ページに、3月上旬に2日間まとめて実施する場合のデメリットとして、複数の県立高校への出願不可とあるが、推薦入試と一般入試では同じ学校に出願するということか。

[佐々木 委員長]

推薦と一般で、同じ学校に出願する制度にするということか。

[菊地 主任指導主事]

そのように想定している。

[佐々木 委員長]

例えば、花巻に住んでいる子が、推薦は盛岡を受け、一般は花巻の学校を受けるということは十分可能かと感じるが、全県的な移動も考慮して全部一律に考えるというか。

[中川 学校教育企画監]

事務局としてはそのように考えて制度を設計して提案しているが、そこも含めて議論いただきたい。

[佐々木 委員長]

推薦入試の検査を一般入試の検査と合わせて、3月上旬の連続する2日間で実施するとして、移動のことを考えると、同じ学校に出願していただくという原案ということだが、そこはフレキシブルに考えていただいて結構ということだが、この点についていかがか。

[浅沼 委員]

日程的には、これはありだと思う。

推薦入試はただ入るための手段になっている気がするので、なくてもいいのかと思う。

先ほど梅津委員が言っていたことがしっくりくる。私は、中学校の部活動について検討した経緯もあるが、生徒は多様になってきて、子供たちが色々な才能や能力を表に出してくる時代になったと感じる。そして、高校では、そういう子供たちが入って高校の中で伸びてほしいということがある。スポーツという世界では勝負があり、過度になっていると批判されているのはそのとおりだが、ただ、それが1つの魅力である。推薦入試で入った後、実はその種目はできない、ただ入る手段になってしまっているということもあり、そんなことになっているなら不要ではないか。その高校の特徴が出て、すごく個性が伸びるということになればいいが、高校側が多様な選抜を行うとなったときに、曖昧なまま、多様に、だら一としてしまって特徴が逆に失われる気もする。

一体、推薦入試とは何なのか、入れるだけのチェック機能だけだというのがちょっと気になる。実は大学も同じで、推薦で入ってから入る部がないということがある。その高校にそういう特色があって、その種目などがすごく活かして、自分は将来それを目指していけると思ったら、そこに推薦でいきたいと選択できるが、別の自分の将来を考えてスポーツではないとなったら別の高校も受けてみたいと思う生徒もいるのではないか思った。

高校では指導者の先生が転勤していくので、ずっといるわけではない。そうなる部活動で特色を出しても、入学後の活動を確実に保証するのは無理なのだろうと感じる。今年中に各学校の入試や特色について出てくるということもあるが、それどころまで特色が出るのかという気がした。

何に反対するわけではないが、そういう考えもあるということを押さえてもらえればありがたい。

[岩館 委員]

親として、感じていることとお伝えしたい。なぜ高校へ入るのかと考えたときに、夢をかなえたい、こんな仕事に就きたいという目標があるのが理想である。今、中学2年生の子供がいるが、中1の時にどこの高校に行きたいか親と一緒に相談し、希望校を用紙に書き学校に提出することとなった。

長男の時は、こうやりたいことか、これになりたいということがあり、どの大学に行きたいという夢やイメージがあったが、次男にはそういうイメージがまだなかったため、どの高校に行きたいか考えるために、この高校でこういうことに特化しているということが分かるものがあるといいと思っているし、そう願っている保護者は多いと思う。中学校から高校について書かれた冊子渡され、持って帰ってきて見て、それを参考にした。資料は、それぞれの中学校で独自に作っているものだと思うが、様々業務がある中、学校の先生方にはそのような冊子を作ってください感謝している。

中学校ではキャリア教育を通して、少しでも子供たちが自分の将来についてイメージが持てるように取り組んでいて感謝しているので、それが高校の入学に繋がって欲しいと思う。

今1人1人にタブレットもあるので、それを使い高校の特色等を自分で調べられるようにし、期待を持って高校に入れるようになるとよいと思う。

それから、推薦に関しても、自分の得意なことを自分で分かった上で、それを活かせるというのはすごく大事なことでよいと思った。

これは令和7年度スタートということだが、部活動だけでなく、部活動や校外での活動という表現にして早目に取り入れると、校外活動等を頑張っている生徒もいるのでお願いしたい。

[佐々木 委員長]

入試日程については、委員会としての合意を見い出す時間がなくなってしまった。

1つ確認したいが、一般入試と推薦入試を連続する3月上旬の2日間で実施するという事は、合格発表も同じということによいか。

そうすると、倍率が高い学校を受検した場合には、二次募集も考えることになるが、どうなるのか。現在の推薦入試であれば再び同じ学校を受けるか別の学校にするか選べるが、2日間連続しての入試となると、推薦、一般のどちらも落ちた場合、希望に合うような学校を選びにくくなるのではないかなと思うがどうか。

[中川 学校教育企画監]

その点について言えば、今の推薦入試を受けない生徒には一般入試しかないということであり、チャンスが1回しかないという点では公平性があるということになるかと思う。2回チャンスがあるということを重視するのであれば、事務局が提案した1つの学校に志願して連続で受けるというところは改めるということも当然であろうかと思う。

残念ながら合格できなかった子について補足する。

[菊地 主任指導主事]

一般入試から二次募集までは概ね現行と同じ日数が必要と考えている。現在、一般の合格発表から5日間くらいで出願して二次募集になる日程となるかと思う。

[佐々木 委員長]

今日の協議はここまでとし、入試日程については、2日間続けて一般と推薦を行った場合どういうメリットや不具合があるかを、委員の皆様にもイメージしていただきながら、次回の協議の場で方向性を見い出していきたい。

5 その他

[菊地 主任指導主事]

【来年度のことについて連絡】

6 閉会（高橋 主任指導主事）